

(様式5)

8 学校アクションプラン

令和6年度 砺波工業高等学校アクションプラン - 1 -		
重点項目	学習活動	
重点課題	生徒の実態に対応した基礎学力の定着と自主的に学習に取り組む態度の育成	
現状	- 基礎学力（計算力、文章読解力など）が不足している生徒が増えている。 - 家庭学習の状況は、毎日学習する生徒が全校生徒の約 65.0%（2 月調査）と少ない。 - 工業高校で取得可能な資格検定について、生徒が自ら積極的に取り組むよう指導しているが、多様な生徒への対応に苦慮している。	
達成目標	○毎日学習をする生徒が 70%以上	○各学科で主たる資格検定を設定し重点的に指導することで、「やればできる」、「もっとやろう」という意識を高め、生徒一人あたりの資格検定受検回数の増加を図る。
方策	- 朝学習で復習ドリルや問題集を行い、基礎学力の確実な定着を図る。また、朝学習と連携した夏季・冬季休業中の課題やワークに取り組ませ、確認テストや宿題テスト等で学習意欲の喚起に向けた指導の工夫・充実を図る。 - 将来の進路や得意分野の伸長のために、生徒自身で資格取得への目標を立て、学習の計画を立てて取り組むことで、授業以外の学習時間を有効に活用できるように工夫する。 〈主たる資格検定〉 機械科・・・1 年次の計算技術検定、情報技術検定、危険物取扱者三種 電気科・・・第 2 種電気工事士、第 1 種電気工事士、2 級電気工事施工管理技術検定 電子科・・・情報技術検定、パソコン利用技術検定、工事担任者第二級デジタル通信 - I C T 機器を積極的に利活用し、授業における指導内容・方法の研究をすすめ、生徒の学力向上や生徒の主体的な学びを育む。タブレット端末を活用した授業展開や朝学習・資格検定の学習に向けた効果的な利用法を推進する。	
達成度	自宅で毎日学習を行う生徒の割合（外部業者による統計。4 月→9 月→1 月） 1 学年 85.0%→76.1%→82.3 2 学年 65.3%→61.4%→58.4 3 学年 51.2%→52.0%（1 月は調査なし）	○機械科 R05→3.32 回/人(合格率 29%)、R06→2.71 回/人(合格率 48%) ○電気科 R05→2.12 回/人(合格率 48%)、R06→3.00 回/人(合格率 68%) ○電子科 R05→2.09 回/人(合格率 64%)、R06→2.09 回/人(合格率 63%)
具体的な取組状況	- 外部業者による統計より 毎日、家庭学習を行う生徒は、1 学年で年間を通じて約 80%、2 学年では 4 月、9 月、1 月と減少し、60%以下となった。3 学年では約 50%となっており、70%の目標は達成できなかった。しかし、1 学年の外部模試における義務教育範囲問題得点率をみると、80%以上得点している者が、国語（4 月 38 人→1 月 62 人）、数学（4 月 22 人→1 月 47 人）、英語（4 月 22 人→1 月 17 人）となっており、教科によるばらつきはあるものの、基礎学力の伸長がみられる。 - 朝学習の取組み 各学年で、朝の登校後の時間に基礎的なワークを解いたり、資格取得の模擬問題の演習をおこなったりしている。家庭学習習慣の定着という点では満足な結果が出なかったが、登校後の自主的な学習習慣は定着しつつあり、効果が表れている。 - 各学科における資格取得の取組み 一人あたりの受検回数は、機械科で減、電気科で増、電子科ではほぼ変わらない結果となった。ただし、機械科 1 年：計算技術検定 3 級 96.4%、情報技術検定 3 級 89.5%、電気科：第 2 種電気工事士 100%（1 年）、第 1 種電気工事士 81%（2、3 年）、電子科 1 年：情報技術検定 3 級 97.1%と、主たる資格検定では良好な合格率となっている。教員による補習や生徒の自習により、最初の受検で合格する生徒が増えたため、回数は増えなかったが合格率が高くなったのではないかと。また、これまで本校で取得を勧めてきた資格以外の資格に挑戦する者も増え、特に電気科の受検回数が増となったのは、電気工事施工管理技術検定 2 級や電気通信工事施工管理技術検定 2 級などの受検者が増えたことが要因と思われる。	
評価	C	C
学校関係者の意見	- 家庭学習時間は増えていないが、課題研究の活動や資格検定に向けた学習や朝学習など、学校の中でしっかり学習に向かう指導ができています。そのことが、各種のコンテストや資格取得の成果につながっていると思う。 - 企業には Q C（品質管理）というものがある。企業の一般的な活動に当てはまる内容なので、この内容を高校のカリキュラムに取り入れ、課題研究などの発表技術の向上につなげてはどうか。	
次年度へ向けての課題	- 家庭での学習習慣を定着させ、学校の授業内容の理解をより深める工夫 - I C T 機器の効果的な活用による、自宅学習や各科の実習、課題や朝学習への応用 - 資格取得により、「やればできる」という自己肯定感を高める支援のあり方	

令和6年度 砺波工業高等学校アクションプラン - 2 -		
重点項目	学校生活	
重点課題	「問題や困難を抱える生徒の把握と支援体制の確立」	
現状	・多様な悩みを抱えて授業や学校生活に集中できないなど問題を抱える生徒が散見され、長期欠席をする生徒が少なからずいる。 ・基本的生活習慣の乱れが学習活動に悪影響を及ぼしている生徒、体調不良を訴えて欠席する生徒が少なからずいる。 ・軽傷ではあるが、不注意から交通事故に遭う生徒が少なからずいる。	
達成目標	・長欠者に対する適切で丁寧な指導・支援を行うとともに、問題を抱える生徒に対応した適切な環境づくりに取り組む。 ・交通事故数ゼロを目標とする。	
方策	・面談を充実させ、生徒の様子・変化を見逃さず、生徒理解に努める。また、生徒に寄り添った指導方法を強化する。 ・生徒情報を共有する機会を設け、必要に応じてケース会議を行うなどし、組織として対応する体制を強化する。 ・保護者との報告・連絡・相談を密にし、家庭との協力体制を強化する。 ・SCやSSW、教育センターなど外部機関の専門家を積極的に活用する体制を強化する。 ・学業を中心とした生活習慣を確立させるために、各科や学年、保健厚生部等と連携した指導体制を強化する。 ・交通安全指導や交通安全教室、ホームルームの時間を活用し、交通事故防止に向けた指導を強化する。	
達成度	＜過年度と本年度のデータ比較（12月までの合計）＞ 長期欠席者（欠席数30日以上）の数 4名（昨年度9名） 欠 席 536（昨年度684） 912（昨年度1050） ※長期欠席者込み 遅 刻 129（昨年度167） 早 退 185（昨年度188）	
具体的な取組状況	・面接週間を設置（1・2学期当初）し、クラス担任が全生徒の様子の観察と学校生活全般にわたる面談を実施した。 ・職員会議後や放課後に、ケース会議を開催し、問題等を抱える生徒の指導方針や方法について全教職員で共通理解を図った。 ・指導に注意を要する生徒についてケース会議を行い、情報を共有し対応に共通理解を図った。 ・保健部と連携し、SCやSSWを活用しながら、問題等を抱える生徒への指導、支援に取り組んだ。 ・保健部と連携し、タブレットを用いた健康調査で、いつでも相談等を書き込めるように取り組んだ。 ・保健部では毎月保健だよりを発行し、生徒に体調管理について啓蒙した。 ・生活習慣アンケートやQ Uアンケート等を実施し、生徒の実態把握・理解に努め、問題を抱える生徒の発見・予防・対応に取り組んだ。 ・スマホやネット利用について、外部講師を招聘したりアンケートを実施したりして、生徒がその利用の仕方や普段の生活を振り返る機会を持った。 ・スタントマンによる事故の実演を交えた交通安全教室を実施し、交通事故防止に向けた取り組みを行った。	
評価	B	・長期欠席傾向の生徒に対する指導に際しては、ケース会議を開催し全職員で指導に当たるなど、教育相談部と連携し取り組む事ができた。今年度は進路変更が3名、休学が5名である。
	B	・いずれも軽傷ではあるが、3件発生した。自転車と自動車の接触が1件、自転車同士の接触が2件（いずれも本校生徒同士）。
学校関係者の意見	・社会で不登校の生徒が増えている。原因は様々だと思うが、不登校傾向の生徒には、初期の段階で認識し対処してほしい。また、学校と保護者だけでは解決が難しいケースもある。第三者的な機関などとの連携も必要だと思う。 ・交通事故については、事故ゼロを目指してこれからも取り組んでほしい。自転車に対する法規制も厳しくなっているの、それらをしっかり守るよう、指導を厳しくすることも必要ではないか。 ・生徒が事故に遭ったりけがをしないよう、学校周辺の危険な場所を改めて点検し、安全対策を行ってほしい。	
次年度へ向けての課題	生徒の気質が変化してきており、問題や悩みを抱える生徒も多様化してきている。少子化から、定員割れの状況が3年間続いており、もの作りに興味・関心が無い者が入学後、長欠から進路変更になるケースもみられる。また、コミュニケーション能力や人間関係作りの能力に劣っている生徒も増えてきているように感じている。一方、問題行動を起こすような生徒の数は減少傾向にある。 以上のことから、生徒の気質の変化等を見極め柔軟な指導を行っていく必要があると考えている。今後は、これまでの指導に加え、生徒が抱える問題や悩みに素早く適切に対応するためにも、他分掌や学校外の専門家との連携を図り、学校全体（チーム）で支援や指導を行う体制の強化を図っていきたい。	

令和6年度 砺波工業高等学校アクションプラン - 3 -

重点項目	進路支援	
重点課題	学年、科と連携した進路指導の充実および自己理解を通じた進路支援	
現状	・ 原材料やエネルギー価格の高騰やヨーロッパでの戦争による輸出入のリスクなどのマイナス要因はあるが、若年労働者の慢性的な人手不足により企業の求人は増加している。 ・ 基礎学力やコミュニケーション能力が不足な生徒がいる。	
達成目標	年度内進路決定 100 %	
方 策	・ 企業との積極的な情報交換により、企業のニーズを捉え生徒・学年に伝え生徒の就職活動に活かす。 ・ 進路に悩む生徒との面談を実施し、進路指導の立場からアドバイスする。 ・ 基礎学力やコミュニケーション能力の不足が心配される生徒を早期に把握し、学年、科との連携の下に本人の希望や適性に応じた進路先の確保・開拓に努める。就労困難な生徒の場合はハローワーク等の専門機関と連携し、適切な進路決定を目指す。 ・ 職業適性検査や自己分析の実施と就職スタートブック（労働局）の活用。 ・ 面接指導の充実により、面接試験だけでなく就労意識の向上を目指す。 ・ 進路の手引きを全学年に配布し、生徒と保護者に進路決定の流れを知ってもらう。 ・ 校外学習や工場見学、インターンシップ、応募前見学、オープンキャンパスを通じて企業や学校を知り、進路決定するように指導する。	
達 成 度	就職希望者 83 名全員が内定。進学希望者 41 名全員の進学先が決定している。卒業予定者 124 名全員の進路が決定しており、目標は達成した。	
具体的な 取組状況	・ 5月の3年生進路保護者会では、進路決定までの流れや注意すべきポイントを記したプリントを作成し、保護者に配布した。学年、科との連携もスムーズに進み、進路決定までの流れを確実に保護者に伝達できた。 ・ 7月求人受付状況を一覧で提示し、就職希望者は一人2社以上見学。進学希望者に向けて国数英物理の補習実施や個別添削指導。オープンキャンパスも行くように指導。 ・ オンラインで実施された企業説明会や学校説明会に適切に対応できた。 ・ 9月学校全体で面接指導に取り組み、就職、入学試験に向かわせた。 ・ 1年時から進路希望を取り、工場や学校見学、進路ガイダンス、インターンシップを通して進路先を知り、3年時で進路を決定するまでの流れができています。	
評 価	A	卒業予定者 124 名全員の進路先が決定。
学校関係者の意見	・ これからも地域の産業を支える人材を育ててほしい。 ・ 生徒の個々の希望に合わせた進路指導を行ってほしい。技術開発や研究者を目指すのであれば高校3年間では足りないの、進学に向けた指導をしっかりと行うなど、その生徒の才能が伸ばせるよう指導してほしい。	
次年度へ 向けての 課題	・ 企業や進学先で必要なコミュニケーション能力や挨拶、マナーを授業や部活動、学校行事や学級活動などで引き続き指導する。 ・ 進学先でのミスマッチを防ぎ、途中退学をなくすように補習等で基礎学力の定着を図る。 ・ 就職先でのミスマッチを防ぎ、早期離職をなくすように、進路希望調査を効果的に利用し生徒の職業意識の醸成を図る。	

令和6年度 砺波工業高等学校アクションプラン - 4 -

重点項目	特別活動	
重点課題	自発的・主体的活動の促進	
現状	小中学校での経験がコロナ禍で多くの活動が規制された現状から、 ・自発的に問題解決のための行動力を身につけている生徒が少ないように感じる。 ・生徒は指示に従った行動をとれるが、自発的に取り組める生徒が少なく、その中でも主体的に取り組める生徒がさらに少ない。	
達成目標	・学校行事「体育大会」と「鷹工展」において、自発的・自主的な取組状況で「取り組んだ」及び「やや取り組んだ」が80%以上、また、満足度で「満足」または「ほぼ満足」が90%以上	
方策	・企画等に生徒会をはじめ生徒が関わることができるようにする。 ・生徒会活動、学校行事等でリーダー活動を多くの生徒が経験できるよう、 ① 役割分担の設定し、役割を遂行するために自ら考えさせ、行動をとる機会を増やす。 ② 準備期間を増やす。	
達成度	アンケート結果 ○体育大会で自発的に取り組むことができたか : はい 97%、いいえ 3% 充実感があり楽しかったか : はい 99%、いいえ 1% ○鷹工展で自ら進んで活動できた : はい 96%、いいえ 4% よかったですか : はい 89.3%、いいえ 1.4%、どちらでもない 9.3%	
具体的な取組状況	体育大会において、応援練習活動期間は年度当初2日間を5日間に増やした。また、体育大会予行はこれまで体育大会前日の半日だけであったところ、1日とし、様々な系の予行演習や団別応援練習、団体競技練習などに十分な時間をとれるようにした。 鷹工展では、生徒会が中心となって、計画・運営を行う伝統がしっかりと受け継がれてきているため、生徒が主体的に取り組む環境が出来上がっている上に、文化部や工学部の催し物の他、各クラスが企画した催し物を行うことで、生徒一人一人が係分担をし、活動した。	
評価	A	アンケート結果では「自発的」が80%を大きく上回った。「満足」は鷹工展でわずかに90%を下回ったが、達成したと言える。
学校関係者の意見	・学校行事へ参加する姿勢や生活習慣の育成の面でも、部活動をしていることが大きく影響しているのではないと思う。ほとんどの生徒が部活動に参加していると聞き安心した。 ・部活動をしていたことで後悔している大人はいないと思う。先生方には、自身を持って学習や部活動の指導をしてほしい。	
次年度へ向けての課題	・学校行事を通して生徒主体でリーダーを中心とした活動をもっと充実させたい。そのために、体育大会や鷹工展の準備ができる計画を早く提示できるようにする。 ・授業時間の確保の関係もあり、無尽に増やすことができないので、必要最小限で、効果的な準備ができる期間を設定する必要がある。 ・年度途中での変更を行ったため、年間計画に影響がでたことから、早い段階から日程調整等を計画する必要がある。 ・鷹工展の各クラスの企画内容は、鷹工展のテーマにあった内容・目的を組み込むことが内容の充実につながると考える。	